

原著論文

学級経営の困難さと教師像に関する研究

片倉 徳生・後藤 広太郎*・後藤 守**

(2018年1月9日受稿)

抄録： 管理職から見た学級経営の困難な状況が生じる要因とその学級担任像を検討するために、北海道内の33市部の公立小学校627校を対象に調査を行った。調査の結果、194校から回答があり、その内72校が3年間に於いて何らかの困難な状況が出現し、その内、学級経営の困難な状況が生じた学校数は23校で有効回答数の11.9%を占めていることが明らかとなった。また、因子分析の結果、学級経営の困難な状況を経験した学校の管理職は、困難な状況が生じる要因を教師の指導力の問題だけではなく、「学校の組織力」や「家庭の教育力」、そして「子ども自身の問題」など、多岐にわたり複合的な要因が積み重なって生じるものととらえていることが窺えた。さらに、管理職は、その学級担任について自己中心的に物事を考え、学習や生徒指導も十分に行うことができず厳格な態度で子どもたちと接し、同僚とも学級経営上の悩みを相談することができないものとして教師像を抱いていることが明らかとなった。

キーワード：学級経営の困難な状況、教師像、因子分析、管理職

Ⅰ. はじめに

2017年3月31日に新学習指導要領の答申が告示された。その中で「生きて働く知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」が、これからの子どもたちの未来に向けて大切な資質・能力であると提示された。これからの学校教育では、これら三つの資質・能力を含めて「主体的・対話的で深い学び」を実現した授業の工夫・改善が求められている。その基盤となるのは、学習指導と生徒指導の両側面を充実させた学級経営の推進である。併せて、直接子どもたちの教育を担う教師の資質・能力の向上にかかっている。

この学級経営に関しては、1998年ごろから「学級崩壊」として「テレビや新聞を一斉に賑わせ始めた」という経緯がある。あれから20年近くの歳月を経過し、今では、「いじめ」「不登校」とともに、「学級崩壊」はどの学級、どの学校にも起こりう

る問題として理解され、加えてこの問題は様々な教育問題の起因となっている。

したがって、この問題を改善することは、新学習指導要領に沿った教育を充実させるためにも、今日的な大きな課題と言える。

Ⅱ. 問題の所在

「学級崩壊」という用語は、マスコミによって命名されたものである。この「学級崩壊」について、国立教育研究所¹⁾（以下、国研）は「学級がうまく機能しない状態」という表現を用い、「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常の方法では問題解決ができない状態に至っている場合」と定義している。また、国研は「学級がうまく機能しない状況」について、全国102学級に聞き取り調査を実施した結果、この状況を10類型に分類し、全ケースの7

割が「教師の指導力不足」で、残りの3割を「指導力のある教師でも指導が困難」であるとして、後者への対応の重要性や深刻さを指摘している。さらには、深谷ら²⁾は「学級の荒れ」という表現を用い、段階的に捉える必要性を調査的に実証し、①何となくクラスがうまくいかない（第1段階・学級の崩れ）、②子どもたちの気持ちが担任から離れてしまう（第2段階・学級の乱れ）、③子どもたちが反発して授業が成り立たない（第3段階・学級の荒れ）に分けることを提唱した。後藤³⁾らは「学級崩壊」の用語を用いて、北海道全ての小学校を対象にしてアンケート調査を行い、回答のあった703校のうち100校が3年間に1件以上の「学級崩壊あるいはそのような問題」が起こったことを明らかにしている（出現率14.2%）。さらに、この状況が出現する学年には、5～6年生と1年生に顕著なこと、学校所在地が農業地域より商業地域で多いことを指摘している。

本研究では、国研の定義を用いることとし、学級崩壊の状況を深谷ら²⁾の3段階で分類することとした。また、学級崩壊という用語ではなく、後藤らが、その後の研究⁴⁾で用いた「学級経営の困難な状況」として捉え、深谷らのいう第3段階目をその状況とした。本研究では、これら事項を前提として、以下4点を研究目的とした。

1. 学校経営に携わる管理職の側が、学級経営の困難な状況をどのように捉えているかを検討し、その認識から学級経営の困難な状況を探る。
2. 学級経営の困難な状況が生じる要因について、段階ごとに明らかにする。
3. 学級経営の困難な状況にある教師像には、どのような特徴が見られるのかを検討する。
4. 学級経営の困難な状況が生じる要因やその教師像を検討することにより、学級経営の困難な状況が生じていない学校と比較することにより、その状況への予防的対策を探る。

Ⅲ. 研究の方法

1. 調査対象

調査対象は北海道内の33市部の公立小学校627校である。対象とした回答者は管理職（校長、教頭、主幹教諭等）である。

2. 調査期日

2017年7月中旬から8月上旬

3. 調査方法

1) 実施方法

調査対象者に、作成された調査用紙を郵送し、無記名での回答を求め、同じく郵送による回収を行った。

2) 調査項目

5つの調査項目からなる。①基本的属性（学校規模、校区内の産業・環境など）。②現在または過去3年間における学級経営の困難な状況の有無（状況が出現した場合は、3段階で分類）。③学級経営の困難な状況が生じた要因：「教師が楽しく分かりやすい授業を行えていないためである」など（26項目）について、その程度を5段階評定。④管理職から見た学級経営の困難な状況にある学級担任像：「わかりやすく楽しい授業ができない」など（19項目）について、その程度を5段階評定。さらに、学級経営の困難な状況の主な要因と学級担任の顕著な特徴については、上位3項目を選択してもらった。尚、①～③の調査項目については、北海道教育大学学級経営等に関する調査研究チーム³⁾が実施した「学級経営の困難等に関するアンケート調査」を基に加筆訂正し、本調査項目として使用した。また、④の調査項目については、深谷ら²⁾の「学級の荒れているクラスの担任は、あなたからみてどんな先生ですか」の質問事項を一部引用した。

4. 分析方法

調査項目③、④の5段階評定については、「1」には5点、「2」には4点、「3」には3点、「4」には2点、「5」には1点を与えた。そして、以下のような分析を行った。

1) 2014年度から2016年度までの3年間、さらには2017年度1学期において、「学級経営に困難な状況」の経験有無で分類し、併せて経験した学校については、深谷らの3段階で区分する。そして、分類した学校について、SPSSを用いて比較検討する。

2) 学級経営の困難な状況を生じさせている要因の比較検討

学級経営の困難な状況を経験した学校（以下、経験校）と経験していない学校（以下、未経験校）（以下、2つのグループ）について、質問ごとに評定値の平均差を検定する。また、評定値を便宜的に間隔尺度とみなして因子分析を行う。主因子法バリマックス回転により因子構造の単純構造化を図る。これらの統計分析を通して、2つのグループの学級経営の困難な状況が生じる要因の特徴を探索する。

3) 学級経営の困難な状況と担任像の比較検討

2つのグループについて、評定値を便宜的に間隔尺度とみなして因子分析を行う。主因子法バリマックス回転により因子構造の単純構造化を図る。これらの統計分析を通して、2つのグループの学級経営の困難な状況の違いによる学級担任の特徴を探索する。

IV. 結果と考察

1. 調査結果

調査の結果、194校の有効回答数を得た。有効回答率は30.9%であった。尚、回答記入者のほぼ四分の三を教頭が占め、教頭回答者の76%が一人で記入したという結果であった。

表1は学級経営の困難な状況の経験別、さらには経験校については3段階別での学校数を示した結果である。194校中122校（約62.9%）が今年度1学期並びに2016年度からの過去3年間、困難な状況が出現しなかったという回答であった。その一方で72校が3年間において何らかの困難な状況が出現し（出現率 37.1%）、その出現学級数は116学級であった。また、経験している72校に

おいて、深谷ら²⁾の分類した第3段階「学級の荒れ、すなわち学級経営の困難な状況にある」学校数は23校で、これは有効回答数の11.9%を占めるに過ぎなかった。2000年3月に実施した後藤ら³⁾の調査結果と比較すると、若干の減少が見られたが、本研究で定義する「学級経営に困難な状況」が生じた学校は1割程度に過ぎなかった。

そこで、本稿では3段階ごとではなく学級経営の困難な状況を経験した学校（経験校）と経験しなかった学校（未経験校）で比較検討することとした。

表1 学級経営の困難な状況についての学校数

学級経営の困難な状況	学校数（校）	割合（%）
困難な状況の未経験校	122	62.9
困難な状況の経験校	72	37.1
第1段階	(20)	10.3
第2段階	(21)	10.8
第3段階	(23)	11.9
段階不明	(8)	4.1
合計	194	

※（ ）は経験校の段階別学校数

2. 学級経営の困難な状況を生じさせている要因の検討結果

1) 因子分析結果

「学級経営の困難な状況が生じた要因」の26項目について正規性の検定を行った結果、26項目すべてにおいて2つのグループに正規性が仮定できなかった。また、2つのグループにおいて、26項目すべての平均値で天井効果並びにフロア効果は見られなかった。併せて、KMO及びBarlettの球面性検定では、困難な状況の未経験校（KMO .834 Barlettの球面性検定 $p=.000<.01$ ）、困難な状況の経験校（KMO .636 Barlettの球面性検定 $p=.000<.01$ ）において、ともにKMOの値が0.50より大きく、有意確率も0.05よりも小さいことから2グループごとで因子分析を行った。その結果を示したのが表2、3である。因子の解釈に

表2 未経験校の「学級経営の困難な状況」の要因に関する因子分析結果

n=96

項 目 番 号	因 子						
	1	2	3	4	5	6	7
6. 子どもに対する親の愛情表現が不足しているためである	0.875	0.045	0.144	0.016	0.009	0.148	0.237
7. 家庭が困難を抱えており、子どもの教育に手が回らないためである	0.772	-0.018	0.146	0.130	0.114	0.226	0.169
25. 子どもに基本的な生活・学習習慣が身についていないためである	0.660	0.357	0.096	0.091	0.197	0.203	-0.170
11. 大人社会の問題が多く、それが子どもに影響しているためである	0.643	0.104	0.128	0.389	0.279	0.005	0.054
5. 親が家庭で子どもを甘やかし、厳しくしつけなくなったためである	0.637	0.205	0.186	0.241	-0.026	0.279	0.106
4. 特別な教育的配慮を必要とする子どもがきっかけとなったためである	0.618	0.140	0.170	0.121	0.040	0.135	0.124
26. 学校教育に対して保護者が無関心・非協力的になったためである	0.540	0.060	0.189	0.382	0.197	-0.016	-0.095
14. 教師が楽しくわかりやすい授業を行っていないためである	0.156	0.838	0.060	0.117	0.142	0.169	0.057
13. 教師の指導力が全般的に不足しているためである	0.080	0.809	0.076	0.169	0.071	0.032	0.038
16. 教師の学級経営が柔軟性を欠いているためである	0.086	0.667	0.058	0.165	0.128	0.137	0.340
18. 学級集団に話し方や人の話の聞き方など、学級のきまりがなかったためである。	0.040	0.512	0.062	0.002	0.265	0.037	0.024
19. 学級集団に教師と児童、児童相互の温かいふれあいのある人間関係が築けなかったためである	0.236	0.477	0.144	0.009	0.383	0.048	0.419
20. 幼稚園・保育所でのしつけが緩くなったためである	0.282	0.131	0.855	0.162	0.091	0.133	0.087
21. 幼稚園で自由保育が増えたためである	0.269	0.105	0.847	0.075	0.218	0.126	0.106
15. 教師の権威が低下したためである	0.238	0.360	0.276	0.583	0.141	0.143	0.022
10. 一学級当たりの児童数が多すぎるためである	0.331	0.154	0.071	0.516	0.094	0.130	0.308
9. 学校での教育内容が、子どもに関心を持っていないものになっているためである	0.130	0.095	0.054	0.515	0.119	0.275	0.214
12. 教師が多忙で子どもたちに十分な配慮をする余裕がないためである	0.317	0.379	0.005	0.419	0.172	-0.044	0.134
23. 校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していないためである	0.035	0.324	0.053	0.138	0.649	0.028	0.122
22. いじめなどの問題行動への適切な対応が遅れたためである	0.087	0.283	0.120	0.124	0.564	0.007	0.114
24. 学校と家庭・地域との信頼関係が築けず、協力がなされにくい状態にあるためである	0.332	0.092	0.301	0.144	0.494	0.218	0.048
3. 自己主張する子どもが増えたためである	0.287	0.207	0.220	0.152	0.039	0.685	0.070
1. 子ども自身の忍耐力が弱くなったためである	0.577	0.191	0.120	0.141	0.009	0.656	-0.055
2. 家庭で「良い子」を演じているストレスを学校で発散しているためである	0.438	0.006	0.032	0.213	0.296	0.479	0.250
17. 子どもと担任教師との相性が悪かったためである	0.088	0.341	0.084	0.205	0.118	0.001	0.714
8. 塾通いや学力競争などに子どもが追い立てられているためである	0.249	-0.033	0.161	0.301	0.282	0.221	0.456
固有値	9.802	2.808	1.506	1.406	1.192	1.082	1.021
因子寄与率	17.764	12.378	7.468	7.000	6.627	6.300	5.558

あたっては、1つの因子に0.550以上の因子負荷量を示した項目を主たる手掛かりとした。

(1) 未経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値、並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して、7因子解17項目を採用することとした。また、解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は63.095%であった。表2に基づき、第1因子を「家庭や地域社会の教育力」(6項目)、第2因子を「教師指導力」(3項目)、第3因子を「幼保・小の接続」(2項目)、第4因子を「教師の権威」(1項目)、第5因子を「学

校の組織力」(2項目)、第6因子を「子どもの自律心」(2項目)、第7因子を「教師と子どもの関係性」(1項目)と命名した。

(2) 経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値、並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して、9因子解18項目を採用することとした。また、解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は65.443%であった。表3に基づき第1因子を「教師指導力」(4項目)、第2因子を「幼保・小の接続」(2項目)、第3因子を「家庭の教育力」(2項目)、第4因子を「家

表3 経験校の「学級経営の困難な状況」の要因に関する因子分析結果

n=71

項 目 番 号	因 子								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
14. 教師が楽しくわかりやすい授業を行えていないためである	0.907	0.036	-0.016	0.064	-0.027	0.075	0.033	0.111	0.012
13. 教師の指導力が全般的に不足しているためである	0.853	0.085	-0.064	0.001	0.021	0.122	-0.030	0.091	0.233
16. 教師の学級経営が柔軟性を欠いているためである	0.757	0.219	-0.075	0.048	0.095	0.180	0.084	-0.190	-0.010
19. 学級集団に教師と児童、児童相互の温かいふれあいのある人間関係が築けなかったためである	0.554	0.105	-0.030	-0.021	0.080	0.447	-0.067	0.065	0.175
18. 学級集団に話し方や人の話の聞き方など、学級のきまりがなかったためである。	0.515	0.077	0.129	-0.098	-0.013	0.411	0.109	0.096	0.512
21. 幼稚園で自由保育が増えたためである	0.159	0.899	0.154	0.080	0.228	0.041	0.044	0.099	0.070
20. 幼稚園・保育所でのしつけが緩くなったためである	0.087	0.851	0.045	0.079	0.047	0.243	0.106	0.149	0.075
7. 家庭が困難を抱えており、子どもの教育に手が回らないためである	-0.083	0.045	0.849	0.133	0.050	-0.091	0.144	0.096	-0.011
6. 子どもに対する親の愛情表現が不足しているためである	-0.066	0.093	0.747	0.319	0.014	0.051	0.054	0.160	-0.080
11. 大人社会の問題が多く、それが子どもに影響しているためである	0.058	0.466	0.504	0.099	0.201	0.084	0.375	-0.023	-0.062
25. 子どもに基本的生活・学習習慣が身についていないためである	0.030	0.039	0.234	0.727	0.245	-0.167	0.189	0.193	0.077
26. 学校教育に対して保護者が無関心・非協力的になったためである	-0.027	0.208	0.251	0.659	-0.066	0.090	0.209	-0.064	0.379
24. 学校と家庭・地域との信頼関係が築けず、協力がなされにくい状態にあるためである	0.055	0.062	0.098	0.539	0.040	0.308	0.066	0.194	-0.069
2. 家庭で「良い子」を演じているストレスを学校で発散しているためである	0.099	0.092	0.177	0.041	0.767	0.060	-0.012	0.051	0.045
8. 塾通いや学力競争などに子どもが追い立てられているためである	0.029	0.132	-0.002	0.061	0.583	0.235	0.295	-0.087	0.183
3. 自己主張する子どもが増えたためである	-0.290	-0.023	-0.154	0.026	0.519	-0.102	0.115	0.414	-0.065
1. 子ども自身の忍耐力が弱くなったためである	0.054	0.257	0.210	0.353	0.409	-0.022	0.007	0.376	-0.043
17. 子どもと担任教師との相性が悪かったためである	0.196	0.299	-0.223	0.190	0.358	-0.052	0.049	-0.042	0.093
23. 校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していないためである	0.257	0.373	0.106	0.173	0.138	0.614	0.067	-0.028	-0.127
22. いじめなどの問題行動への適切な対応が遅れたためである	0.243	0.282	0.005	0.068	-0.043	0.599	0.168	0.190	0.235
4. 特別な教育的配慮を必要とする子どもがきっかけとなったためである	-0.288	0.108	0.193	-0.005	-0.083	-0.406	0.150	0.008	-0.055
10. 一学級当たりの児童数が多すぎるためである	-0.021	0.211	0.179	0.092	0.202	-0.087	0.695	0.022	0.316
12. 教師が多忙で子どもたちに十分な配慮をする余裕がないためである	0.038	0.009	0.152	0.394	0.073	0.112	0.667	0.158	-0.161
5. 親が家庭で子どもを甘やかし、厳しくしつけなくなったためである	0.064	0.144	0.287	0.246	0.113	0.135	0.036	0.805	0.072
15. 教師の権威が低下したためである	0.213	0.281	0.032	0.110	-0.178	0.117	0.232	0.348	0.031
9. 学校での教育内容が、子どもに関心を持っていないものになっているためである	0.221	0.046	-0.157	0.115	0.146	0.052	0.031	0.018	0.626
固有値	6.369	3.996	1.984	1.599	1.455	1.291	1.178	1.115	1.019
因子寄与率	12.280	9.388	7.976	7.167	6.972	6.381	5.495	5.280	4.504

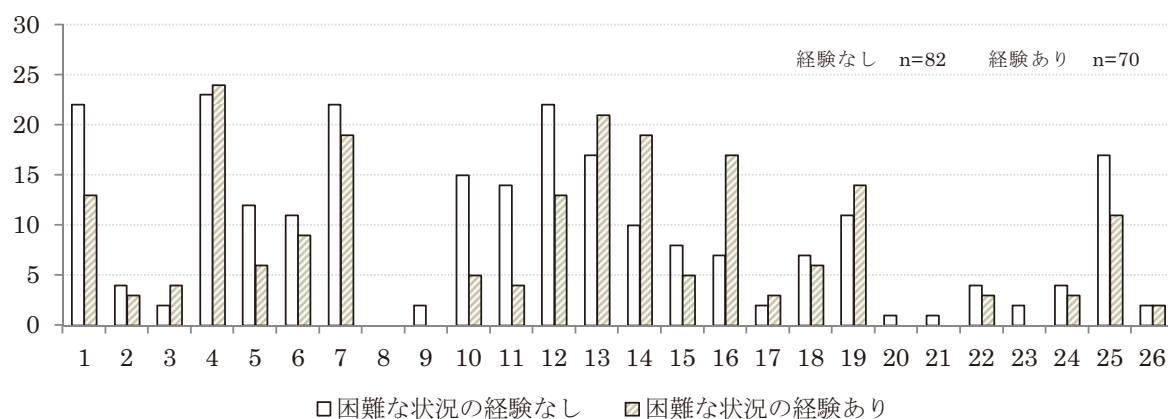


図1 学級経営の困難な状況の主な要因（3項目選択）縦軸：選択度数 横軸：各項目

庭の教育に対する関心」(2項目), 第5因子を「子どものストレス」(2項目), 第6因子を「学校の組織力」(2項目), 第7因子を「教育環境の問題」(2項目), 第8因子を「親の躰」(1項目), 第9因子を「教育内容への関心」(1項目)と命名した。

2) 学級経営の困難な状況を生じさせている主要因に関する結果 (3項目選択)

困難な状況が生じた主要な要因を3つ選択してもらった(複数回答)。その結果が図1である。横軸に各項目、縦軸に選択した学校数を示している。また、経験校と未経験の2つのグループの関連性について、因子ごとの共通項目を基にクロス集計から独立性の検定を行った。その結果、どの因子においても、経験校と未経験校の間には関連性は見られなかった(第1因子の結果 Pearson χ^2 値 2.014, $df=3$, $p=.569>.01$)。また、経験校は第1因子の項目13, 14, 16, 19のみ、未経験校を上回る学校数が見られた。その結果が表4である。

表4 学級経営の困難な状況の主要要因比較

第1因子(クロス集計表) $n=116$

	13	14	16	19	合計
未経験校	17	10	7	11	45
経験校	21	19	17	14	71
合計	38	29	24	25	116

Pearson χ^2 値 2.014, $df=3$, $p=.569>.01$

3) 学級経営の困難な状況を生じさせている要因に関する考察

因子分析の結果から学級経営の困難な状況を経験している学校と経験していない学校の管理職において、「教師指導力」「幼保・小の接続」「学校の組織力」がほぼ一致した要因であった。困難な状況の未経験校の管理職では、その第1の要因を「家庭や地域の教育力」として関連性が高いものの、他の6因子は学校教育関連の要因であった。それに対して、困難な状況の経験校の管理職は、

「教師指導力」をはじめ、「幼保・小の接続」「家庭の教育力」「学校の組織力」「教育環境の問題」「子ども自身の問題」など単純な対応関係ではなく多岐にわたり複合的な要因が積み重なって困難な状況が生じるものととらえていることが窺えた。特に、その第1因子の要因である「教師指導力」については、教師の教科指導をはじめ、柔軟性を欠いた生徒指導、そして教師と児童、児童相互の人間関係まで関連しているものと推察できる。このことは、表5の自由記述からも垣間見ることができ、困難な状況に陥った結果、学級経営に対する保護者からの信頼も失ってしまったという現状も感じられる。加えて、項目「14. 教師が楽しくわかりやすい授業を行えていないためである」や「16. 教師の学級経営が柔軟性を欠いているためである」は前述の国研による調査結果¹⁾の10類型の「教師の学級経営が柔軟性を欠いている事例」と「授業の内容と方法に不満を持つ子どもがいる事例」とほぼ一致しており、この因子を説明する大きな要素であると言える。

次に、第2因子「幼保・小の接続」は、今般小1プロブレムの問題が叫ばれ、幼保小中の円滑な連携が求められている中で、小学校生活にうまく適応できていない状況が窺える。東京都教育委員会の2011年11月、校長を対象に行った調査⁵⁾では、有効回答数の18.2%の小学1年生で教師の話を聞かない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩くなどの不適応状況が入学後しばらく解消されなかったと報告している。この報告からも困難な状況が生じる妥当な要因であると言えるが、幼保・小に関わった項目が2項目しかなく、今後さらなる検討が必要となる。

さらに、2000年3月に後藤ら³⁾が行った「学級経営に関するアンケート」調査結果と検討してみる。後藤らの「学級崩壊」状況の主要要因(3項目選択)上位10項目と比較すると、本調査での経験校では7項目が一致した。国研の調査結果同様、「14. 教師が楽しくわかりやすい授業を行えていないためである」など教師指導力において、3項

目が一致した。後藤らの調査結果で一番多かった要因「5. 親が家庭で子どもを甘やかし、厳しくしつけなくなったためである」は、本調査では下位因子の第8因子「親の躰」ではあるが、一致するところである。後藤ら³⁾の調査から17年が経ち、本調査では第2因子「幼保・小の接続」、第7因子「教育環境の問題」、第9因子「教育内容への関心」が因子を構成する項目数は少ないが、今日の学級経営の困難な状況を探るうえで特徴的な要因と言える。

表5 学校経営の困難な状況の自由記述

◎経験校	
○第1段階	<ul style="list-style-type: none"> ・ネット、ゲームの長時間使用による生活リズムの崩れ、発達上の課題。 ・発達障害を抱える、もしくはその疑いのある子が発端となる場合がとて多い。しかも数が多い。
○第2段階	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の担任に対する厳しすぎる要望等を受け入れたため、子どもに対してそれまでのような対応を取りにくくなったため。 ・対象児童の特性に対して、チームとして対応しきれなかったため。
○第3段階	<ul style="list-style-type: none"> ・担任教師に対する保護者の期待と現実のギャップがあり、信頼できなくなった。
◎未経験校	
	<ul style="list-style-type: none"> ・マスコミの過剰反応。 ・メディアによる、偏った主張が広がるためである。

3. 学級経営の困難な状況と担任像の検討結果

1) 因子分析結果

「学級経営の困難な状況」が見られる学級担任に関する19項目について正規性の検定を行った結果、19項目すべてにおいて、2つのグループに正規性が仮定できなかった。また、2つのグループにおいて、19項目すべての平均値で天井効果並びにフロア効果は見られなかった。併せて、KMO及びBarlettの球面性検定では、困難な状況の未経験校（KMO .921 Barlettの球面性検定 $p = .000 < .01$ ）困難な状況の経験校（KMO .888 Barlettの球面性検定 $p = .000 < .01$ ）において、ともにKMOの値が0.50より大きく、有意確率も

0.05よりも小さいことから2グループごとに因子分析を行った。因子分析の結果については表6、7に示したとおりである。因子の解釈にあたっては、1つの因子に0.650以上の因子負荷量を示した項目を主たる手掛かりとした。

(1) 経験校の因子分析結果

経験校の因子分析結果は表6に示したとおりである。このグループでは固有値の値、並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して、4因子解12項目を採用することとした。また、解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は66.543%であった。表6に基づき、第1因子を「教師の自己中心性」（5項目）、第2因子を「指導力不足」（3項目）、第3因子を「コミュニケーションの欠如」（2項目）、第4因子を「教師の厳格な態度」（2項目）と命名した。

(2) 未経験校の因子分析結果

未経験校の因子分析結果は表7に示したとおりである。このグループでは2因子解18項目を採用することとした。また、解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は64.261%であった。表7に基づき第1因子を「指導力不足」（15項目）、第2因子を「柔軟性の不足」（3項目）と命名した。尚、第1因子「指導力不足」は全項目数のほぼ8割を占め、教科指導、保護者対応、同僚との関係性など総花的である。このことから、未経験校の管理職は、学級経営に困難な状況が見られないものの、普段の教師の姿から判断したものと考えられる。

2) 学級経営の困難な状況と顕著な学級担任像についての検討結果（3項目選択）

「学級経営の困難な状況」または「その状況に陥りやすい」学級担任に見られる顕著な特徴について3つ選択してもらった（複数回答）。その結果が図2である。横軸に各項目、縦軸に選択した学校数を示している。経験校、未経験校ともに一番多かったのが、「1. 分かりやすく楽しい授業ができない」であった。次に多かったのが、「8. 子どもを集団として把握できず、指導力もない」で

表6 経験校の学級経営の困難な状況での担任像

n=68

表7 未経験校の担任像 n=102

項 目 番 号	因子			
	1	2	3	4
11. 教職員との協調性がなく自分勝手	0.743	0.208	0.446	0.122
13. ひいきしたり, 不公平な扱いをする	0.719	0.427	0.124	0.205
19. 子どもや保護者の対応で悩みを抱え, 学校を休みがちである	0.719	0.247	0.202	-0.145
12. 問題が起こると, 子どもの責任にする	0.713	0.426	0.078	0.223
5. 何にでもいい加減	0.664	0.307	0.226	0.168
10. 社会性がない	0.592	0.337	0.492	0.074
4. まじめで熱心すぎる	-0.515	-0.097	0.015	0.317
2. 授業中、子どもがしゃべっていても注意しない	0.234	0.794	0.116	-0.165
8. 子どもを集団として把握できず, 指導力もない	0.446	0.718	0.411	0.100
1. 分かりやすく楽しい授業ができない	0.141	0.667	0.197	-0.044
16. 保護者との対応がうまくできない	0.373	0.649	0.449	0.024
7. 子どもを叱れない	0.285	0.619	0.328	-0.122
9. 子どもの気持ちが分からない	0.487	0.589	0.431	0.174
15. 子どもをあまり褒めない	0.449	0.541	0.365	0.201
14. 決まった子に注意が集中する	0.224	0.451	0.089	0.169
17. 自分の悩みを相談する人がいない	0.070	0.346	0.782	0.081
18. 同僚とのコミュニケーションが少なく, 表情も暗い	0.316	0.257	0.711	0.154
3. 忘れ物をすると厳しく叱る	0.034	-0.001	0.009	0.871
6. きまりに厳しすぎる	0.063	0.009	0.162	0.727
固有値	9.417	2.037	1.470	1.092
因子寄与率	22.336	21.640	13.449	9.119

	因子	
	1	2
8.	0.944	-0.049
10.	0.899	-0.001
9.	0.895	0.026
7.	0.886	-0.130
15.	0.866	0.007
12.	0.845	0.068
2.	0.831	-0.049
11.	0.820	-0.016
13.	0.820	0.057
16.	0.816	-0.079
5.	0.788	0.018
19.	0.764	-0.038
18.	0.749	-0.118
17.	0.720	0.049
1.	0.698	0.092
14.	0.535	0.155
6.	0.223	0.794
4.	-0.174	0.680
3.	-0.010	0.663
固有値	10.899	2.073
因子寄与率	55.735	8.526

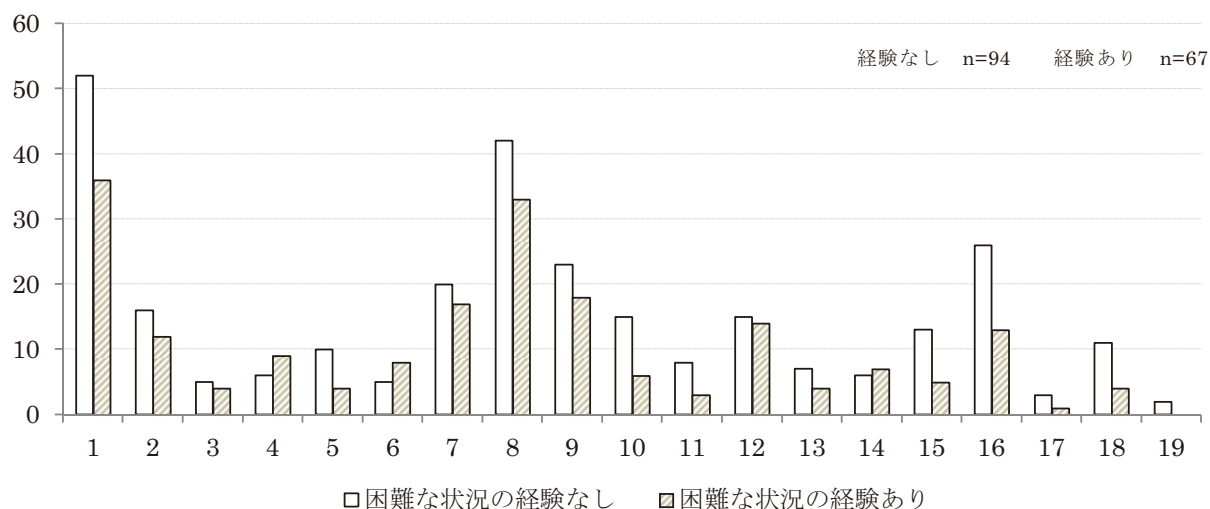


図2 「学級経営の困難な状況」における学級担任に見られる顕著な特徴（3項目選択）縦軸：選択度数 横軸：各項目

あった。この2項目は経験校の第2因子「指導力不足」に含まれる項目で、この因子を説明する重要な要素であると思われる。また、経験校と未経験校の2つのグループの関連性について、因子ごとの共通項目を基にクロス集計から独立性の検定を行った。その結果、どの因子においても、経験校と未経験校の間には関連性は見られなかった（第1因子の結果 Pearson χ^2 値 3.616, df=1, p=.460 >.01）。経験校が未経験校よりも度数が多かった項目は、「3. 忘れ物をすると厳しく叱る」「6. きまりに厳しすぎる」で経験校の第4因子「教師の厳格な態度」を構成する2項目であった。このことから、経験校の管理職は厳しく子どもたちに接する教師に注目していることが窺える。

3) 学級経営の困難な状況における学級担任像についての考察

因子分析の結果から学級経営の困難な状況を経験している管理職は、その教師像を自己中心的に物事を考え、学習や生徒指導も十分に行うことができずに厳格な態度で子どもたちと接し、同僚とも学級経営上の悩みを相談できないイメージをもっているものと推察できる。この教師像は困難な状況において、顕著に見られる学級担任の特徴についての自由記述からも窺うことができる。その結果を示したのが表8である。

表8から管理職がとらえた「周りのアドバイスや指導を聞き入れない、改善しようとしなない」「様々なことに自制心が低い」「時間通りに休み時間とならない」などは、第1因子「教師の自己中心性」との関連性を窺うことができる。同様に、「柔軟な対応ができない」「こだわりが強く、周囲の指摘に素直に従わない」などは、第4因子「教師の厳格な態度」を補填する要因であると考えられる。深谷²⁾は、調査結果から「荒れ」を起こす教師として2つのタイプを指摘している。1つは「指導力がないタイプ」で、もう1つは「指導力があり熱心だが態度が固いタイプ」である。これは子どもの気持ちを理解できない教師、または子どもの気持ちを理解しようとしなない教師であると述べ

ている。これらのタイプの教師像は、本研究における第2因子「指導力不足」、第4因子「教師の厳格な態度」と関連し、20年近く経っても変わらない困難な状況を生じる教師像と言える。特に、自由記述「思わずやってしまう子の気持ち、わかっていてもやってしまう子の気持ちが理解できない」など、細部にわたったきまりだけにとらわれ、子どもに寄り添った児童理解で指導することができない教師像といったものが浮き彫りになったと言える。そして、自由記述「コミュニケーション不足（職場、保護者、児童）」、「あまり人と話さない」などからは、第3因子「コミュニケーションの欠如」との関連を窺うことができる。加えて、この因子は、学級経営の困難な状況の要因に関する因子分析結果における第1因子項目「19. 教師と児童、児童相互の温かいふれあいのある人間関係が築けなかったためである」とも関連し、深谷²⁾の言う「子どもの気持ちを理解しようとしな

表8 困難な状況において、顕著に見られる学級担任の特徴（自由記述、経験校のみ掲載）

○第1段階	
・柔軟な対応ができない。	
・プライドが高い。注意や意見されることを嫌う。	
・学習指導だけでなく、生活指導においても指導力に欠ける面がある。	
・周りのアドバイスや指導を聞き入れない、改善しようとしなない。	
・自分がした方策に対しての成果を求め過ぎ、満たされないと感じ込む。	
・思わずやってしまう子の気持ち、わかっていてもやってしまう子の気持ちを理解できない。	
○第2段階	
・教員としての経験不足。	
・指導に一貫性がない。アンテナが低い。	
・話し方がはっきりしない。	
・コミュニケーション不足（職場、保護者、児童）。	
・だらしない。社会性が低い。	
・様々なことで自制心が低い。	
・独りよがりなタイプ。人の話が聞けない。	
・あまり人と話さない。	
○第3段階	
・プライドが高い。その割に丸投げする。	
・こだわりが強く、周囲の指摘に素直に従わない。	
・時間通りに休み時間とならない。	
・指導法が旧態依然としている。	
・笑い、ユーモアがない。	
・子どもの気持ちの理解、個別と集団の指導の使い分けがうまくできない。	

いタイプ」の教師像を垣間見ることができる。児童とコミュニケーションを図ることは、児童理解の基本だけに学級経営の基盤を成す注目すべき重要な因子であると思われる。

V. 総合的な考察

本研究では、管理職から見た学級経営の困難な状況の要因と学級担任像について検討してきた。学級経営の困難な状況が生じる要因では、有効回答数の少なさから段階ごとに明らかにすることはできなかった。しかし、以下のことが明らかとなった。

学級経営の困難な状況を経験した管理職は、その第1の要因を教師の指導力だけではなく、学校の組織力の問題、家庭の教育力や子ども自身の問題として多岐にわたり複合的なものとしてとらえている。その教師の指導力に関して、管理職は学習や生徒指導力に欠けていることはもちろんのこと、自己中心的で厳格な態度で子どもたちと接し、同僚や保護者、子どもたちともコミュニケーションが取れないものとしてとらえているようである。このように、本研究では学級経営の困難な状況が生じた第1の要因「教師の指導力」を具体的な教師像として明らかにすることができた。

そこで、学級経営の困難な状況での学級担任像をもとに、その状況に対する予防的対策を探ることとする。

まず、教師の自己中心性、並びに教師の指導力不足について考察する。

中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」⁶⁾では、グローバル化や高度情報化など社会が急速に進展する中でICTの利活用や特別支援教育、外国語教育や道德といった新たな教育課題、並びに主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善などに対応した研修が必要であると謳っている。特に、学習指導要領の改訂に伴い、複雑化・困難化した課題に的確に対応するためにも、教員個々の対応よりも、「チームとしての学校」という視座から管理職を

中心として組織的、一体的に教育課題に取り組める体制づくりを推進することが大切である。そのことが学級経営の困難な状況の要因の一つである「学校の組織力」強化につながるものと考え、これからの道徳科や外国語科の授業づくり、より困難度を増していく生徒指導上の課題に対応するためにも管理職の指導力、並びに教員の同僚性を発揮するのはもちろんのことALTやカウンセラーなど、その分野での専門家との連携・協働が大切となる。その実践が開かれた学級経営に深化するとともに、教員の指導力向上に結実するものと考え、その教員の指導力に係わって梶田は⁷⁾、教師の不易なる資質・能力として「人間的社会的に成熟していること（開かれた柔軟なパーソナリティをもつなど）」など5点を挙げ、これらは学校教師に要求される不易な資質・能力であり、教員としての基盤であると述べている。人間的な温かさや協調性、常に学び続ける姿勢を持ち、豊かな教養と識見を持つことが、これからの教員に一層求められる。併せて、管理職のより一層のリーダーシップを発揮することで教職員の意識改革を図ることが重要となる。

次に、困難な状況での学級担任像「コミュニケーションの欠如」「教師の厳格な態度」の視点から、教師と児童、児童相互の温かな人間関係の構築をめざした学級経営の充実について考察する。

菅野⁸⁾は子どもとの関係づくりにつまづく理由として、教師のゆとりのなさを指摘している。菅野は、著書の中で「ゆとりがなくなると、ゆったりした目で子どもの行動をとらえられなくなり、行動も『省エネ的』となる。寛容さが減り、子どもに対して厳しくなる。時には冷静さを失い、子どもの些細な言動に苛立って子どもへの叱責が多くなる」と述べている。加えて、よりよい関係づくりのために、菅野は、「どの子とどのように行き違いが生じているのか、言葉のかけ方、取った態度はあれでよかったかを内省できる指導力が求められる」と指摘している。管理職として、絶えず学級の様子を注視し、教師と児童、児童相互間

の言動に対して、機を逃すことなく学級担任への指導助言を行うことが大切である。さらに、森田ら⁹⁾は、児童が学級で居心地よく過ごせるための指針として、児童の社会性の高い学級では教師と児童の上下関係（ルールの徹底）を確立し、教師と児童及び児童間の水平関係（フラットな心の通い合い）も確立した学級経営を行い、友達関係を育みにくい学級担任は水平関係に偏った学級経営を行っている、と報告している。児童集団の望ましい経営の在り方のためには、教師と児童、児童相互の温かな人間関係の構築も大切であるが、学校として統一した学習規律を遵守できるような学級担任の毅然とした姿勢や関係づくりも必要となる。

以上、困難な状況に陥った学級担任に対して、管理職の視点からその対応策を論じてきた。管理職として客観的に学校全体を俯瞰できる立場にあるだけに、今後はアンテナをより高くして学級経営に関する様々な情報を収集する必要がある。また、実際に児童の指導にあたる教師の視点で学級経営の状況を振り返り、本研究結果と比較検討する必要がある。

附 記

本研究を進めるにあたり、本調査にご協力いただいた道内小学校の校長先生はじめ管理職の皆様には厚くお礼申し上げます。ここに附記して謝意を表す。尚、本論文を作成するにあたって、後藤守と後藤広太郎が論文の構成及び資料の収集について担当し、片倉徳生が執筆を担当した。さらに、三上勝夫（こども発達学研究科）が最終原稿を確認し、加筆修正した。

文 献

- 1) 国立教育研究所（学級経営研究会）：学級経営の充実に関する調査研究。平成10年・11年度文部省委託研究中間報告，1999。
- 2) 深谷昌志・土橋稔・鶴巻景子・島田美佐江・三枝恵子・戸塚智・深谷和子：「学級の荒れ」

をどうとらえるか（教師調査）モノグラフ・小学生ナウ。ベネッセ教育総合研究所，19（2）：2-101，1999。

- 3) 北海道教育大学学級経営等に関する調査研究チーム：学級経営の困難等に関するアンケート調査。北海道教育大学教育実践総合センター，2001。
- 4) 後藤広太郎・川端愛子・後藤守：教職志望学生から見た「学級経営上の困難さ」のイメージ。北海道教育大学大学院研究紀要，12:23-33，2014。
- 5) 東京都教育委員会：平成22年度小1問題・中1ギャップの実態調査。東京都教育庁報，575，2011。
- 6) 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）（2017. 12. 26）
- 7) 梶田叡一：教師力の再興－使命感と指導力を。134-141，文溪堂，2017。
- 8) 菅野純：子どもとの関係づくりにつまづく教師。児童心理，71（7）：1-10，2017。
- 9) 森田純・山田雅彦：学級経営に影響を及ぼす教師－児童関係に関する質問紙調査。東京学芸大学教育学研究年報，32：23-37，2013。

A Study on Difficulties with Classroom Management and Teacher Statue

KATAKURA Norio, GOTOH Kotaro And GOTOH Mamoru

Abstract: In order to examine what factors cause difficulties in class management from the viewpoint of managerial staff and their class teacher image, we surveyed 627 public elementary schools in 33 cities in Hokkaido. As a result of the survey, 194 schools responded and in 72 schools, with difficulties that emerged in the last 3 years, among them were problems of classroom management. The number of schools in which 23 schools occurred revealed that it accounted for 11. 9% of the number of valid responses. In addition, as a result of the analysis, the manager of the school who experienced difficulties in class management, the manager himself is a factor that can contribute to difficult situations. It is not only a problem of teachers' lack of leadership but also the organizational strength of the school, educational ability of the family, and it seems that the problems are caused by an accumulation of diverse and complex factors. Furthermore, managers experiencing difficulties in class management are self-centered thinking things, learning and student fingers. We can not conduct enough, we touched children with a strict attitude, and our colleagues also consult about trouble in class management. It is clear that it has a teacher statue that can not be done.

Keywords: Difficult situation of class management, teacher statues, factor analysis, managerial positions